ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.135

HA244 クマ飼養用の舟形さじ　ウリチ
長さ14.4cm x 幅 7.0cm x 高さ 4.8cm
収集地：ロシア沿海州、1990年収集

ウリチの彫刻家ニコライ・ウー (1958 ～ 2008)の作品。当館の収集時の情報では「舟形さじ」と記録されているが、柄の部分にクマが彫られていることから、クマ送り用のクマを飼養するために使用される特別のさじ、ウリチ語で「スプ」と思われる。クマ送りの伝統を持つ数多くの北方民族の中でもウリチはアイヌと同じ「飼いグマ」型のクマ送りを行うことで知られる。

ウー氏はウリチだが、ロシア・ハバロフスク地方ナーナイ地区ボロン村の出身で、ウリチ地区ブラヴァ村、ナーナイ地区ジャリ村、シカチアリャン村を転々として芸術家人生を送った。1996年には山形県鶴岡市のアマゾン民族館が主催したナナイ民族展で来日している。

目次　Contents

1　表紙　クマ飼養用の舟形さじ
2-4　第38回北方民族文化シンポジウム網走「映像と北方民族文化」
5　写真展「アラスカの小さな村の現在：日常・ごみ・環境変化」
　／講座「アラスカの小さな村の現在」
6　ロビー展「北に魅せられた人１　文化人類学者 原ひろ子」
　／講座「北の植物」
7　講習会「ウイルタ刺繍」
　／モンゴル調査報告
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第38回北方民族文化シンポジウム網走

映像と北方諸民族文化

2024.10.19-20

映像人類学の分野では、北方民族文化を対象とした数多くの成果が上げられてきました。今回のシンポジウムでは、北方地域の事例を中心に、民族文化を対象とした映像について検討しました。以下に各発表の概要を報告します。

＊　＊　＊

【第1部】映像とマイノリティ文化（座長：田口洋美氏/狩猟文化研究所）

「マイノリティ研究における映像記録の活用と課題―在日コリアンの民族教育運動を中心に―」（宋 基燦氏/立命館大学）

映像は、文化を全体性、個別性の両面から同時に記録可能なメディアであり、記録された時間を介して脈絡をも記録できる点から、人類学的研究の可能性を広げてくれる。本報告では、発表者自身の経験から、在日コリアン研究における映像記録活用の可能性と課題について考察した。

映像記録は、生活文化に関する映像アーカイブの構築、「機械目」としての調査補助、映像共有による相互的現場知識の確保、現地民プロジェクトの実施、作品制作を通じてマイノリティに関する理解を深めるといった可能性を持つ。一方でマイノリティに対する構造的な差別が存在する場合、アウティングの恐れがあるため、研究対象に対する映像記録とその活用は慎重に行う必要がある。

宋 基燦氏

「北方民族と映像人類学 その昨日、今日、明日―北海道立北方民族博物館のための映像収集活動から学んだこと」岡田一男氏（東京シネマ新社）

本発表では、北方諸民族文化の映像記録に関し、映画の誕生から現在に至る変遷を概観した。発表者は、1960年代に全ソ連国立映画大学で学び、1970年代から四半世紀にわたり、国際的な科学映像の収集公開活動に携わった。科学映像制作では、西独の科学映画研究所が提唱した科学的ドキュメンテーションフィルムの影響が強い。一方、ソ連の映画教育では、歴史として映像のテーマを考えることが重要とされた。発表者は、上記の二つの視点を持って、北方民族博物館の映像収集にも協力してきた。

本発表では7つのテーマ、すなわち①科学映画の始まり、②映画誕生期の人類学映像、③初期映画の第一四半世紀、④再現民族誌映画の考察、⑤記録者と被写体コミュニティの関係、⑥先住民自身が自らを記録し、語る時代、⑦北方ユーラシア諸民族存亡の危機、に沿って話を進めた。

岡田一男氏

【第2部】北海道アイヌの事例（座長：内田順子氏（国立歴史民俗博物館）

「日本写真史の内と外におけるアイヌ民族の表象」（中村絵美氏/北海道大学大学院文学院・博士課程）

北海道では、開拓事業の公的記録として1871年から写真が用いられる。これを含め、幕末から明治大正期まで道内で撮影された写真が、道内に約6000枚残るとされる。1960年代後半から70年代に行われた写真家らによる日本写真史編纂の過程でこの写真群の一部が紹介され、写真の「記録性」を示す優れた表現として高い評価が与えられた。本発表では、このなかでアイヌが被写体となった写真を分析し、その美的評価について一考を加えた。

他方、1970年代の北海道では、被写体となるアイヌやそのコミュニティーと協働して写真撮影を行った例がある。本発表では、アマチュア写真家による写真サークル・長万部写真道場の作品を取り上げ、撮影者と被写体となった人々相互の協力関係について検討した。

中村絵美氏

「アイヌ民族文化財団の映像コンテンツについて」（岡田恵介氏/公益財団法人アイヌ民族文化財団）

アイヌ文化振興・研究推進機構とその後継団体であるアイヌ民族文化財団は、アイヌ文化の振興に関する多彩な事業を展開し、その一環として動画の活用にも取り組んできた。「アイヌ生活再現マニュアル」事業では、手仕事や芸能などの保存と継承のため、35本の映像教材を制作した。さらに、近年の動画を手軽に楽しめる環境の普及に合わせ、アイヌ語入門講座や口承文芸のアニメーションなど、多様な映像教材を提供している。2020年には、民族共生象徴空間（ウポポイ）の開業に際し、古いもので100年前の記録映像を参考にしながら、さまざまな時代の伝統芸能を復興・伝承する取り組みを行った。アイヌ文化の発信に向けた記録映像の活用の事例と言えるだろう。

映像はアイヌ文化の復興や普及啓発を進めるための重要なツールであり、アイヌ文化の多彩な側面を共有し、その魅力を多くの人々に伝えるための貴重な資産となっている。

岡田恵介氏

【第3部】ロシアの事例（座長：高倉浩樹氏/東北大学東北アジア研究センター）

「チュコトカの家庭写真：景観と愛情に満ちた知識に関する先住民文化」（ヤロスラワ　パナーコヴァ氏/スロバキア科学アカデミー）

本発表では、ロシア極北・チュコトカの先住民コミュニティにおける視覚と思考の関係を伝えるため、先住民の視覚（知覚）とビジョン（心的表象）がどのように家庭写真に変換されてきたかを検討した。1960 ～ 70年代に導入された写真の技術は、ソ連時代の生活を記録するための道具となった。本発表では、ソ連期、ポスト・ソ連期の美意識との比較により、この写真の伝統が内包する先住民文化起源の美的要素を明らかにすることを試みた。

先住民の家庭イメージとその社会的文脈の分析に際し、本発表では、視覚データと言語データを結びつけるために写真抽出法を用いた。相互依存的なこれらのデータは、社会現象の深い理解のために重要で、先住民コミュニティが写真を通じて世界を知覚・表象する方法に関する洞察をもたらす。このアプローチは、視覚的表象とポストコロニアルのアイデンティティに関する議論への貢献を目的とし、視覚研究における先住民の視点の重要性を強調する。

ヤロスラワ　パナーコヴァ氏

「視覚的な語りによる博物館コレクションの向上」（エーリッヒ　カステン氏/シベリア文化財団）

本発表では、まず博物館資料に関する知識を伝え、表現するために記録された先住民の語りを使用し、博物館研究に対する映像人類学の貢献について検討した。

次に、多様な利用者グループの期待に応えるため、今日の情報技術を活用しつつ、博物館資料に関する先住民の知識をどうすればもっとも適切に表現できるかについて検討した。利用者グループには、博物館の観覧者や研究者が含まれる。しかし、博物館資料を製作した先住民コミュニティが、自らの文化遺産に再びアクセスできるようにするという点を重視すべきである。こうした目的に対しては、展示図録（印刷物あるいは多言語対応の電子バージョン）に加え、ウェブサイトが最適だろう。ウェブサイトでは、博物館資料と関連した包括的な知識を適切に構造化された形式で提示することができる上、例え遠隔地でも、多様な利用者グループが容易にアクセスできるのである。

エーリッヒ　カステン氏

【第4部】映像の制作と解釈（座長：呉人惠/北海道立北方民族博物館）

「狩猟採集文化の技術と行動を視点としたと映像人類学の新たな役割：AIを使用した文化再現資源の収集システムである「民族知（民俗知）プール」の社会実装の必要性」（田口洋美氏/狩猟文化研究所）

1990年代半ばから2017年にかけて、発表者はロシア極東の先住民文化に関する人類学的研究に携わる過程で、先住民の狩猟活動や丸木舟作りなど、狩猟関連技術に関する独

自の民族誌映画を制作してきた。こうした伝統的な映像人類学では、映像によってその時代の民族集団や地域集団の社会・文化を記録し、分析・研究すること、またその記録を後世に残し伝えることに重点が置かれてきた。

しかし、記録映像を見れば実際に狩猟ができるようになるわけではない。生活技術はそれぞれ膨大な知識、身体的、精神的、感覚的能力を含むからである。本発表では、宮崎県延岡市の野生動物による農作物被害の軽減・防止プロジェクトを事例として、狩猟文化技術の継承と文化の復元に映像人類学的手法を活用する可能性について検討した。

田口洋美氏

「撮影・編集・再解釈によって創出される映像表現の分析―ニール・ゴードン・マンロー撮影の『The KAMUI IOMANDE』を事例として―」（内田順子氏/国立歴史民俗博物館）

本報告では、アイヌ文化の記録や研究を目的として制作された映像作品を対象に、撮影、編集、再解釈の各過程においてアイヌ文化のイメージがどのように映像として形成されるかを分析した。具体的には、1930年にニール・ゴードン・マンローが撮影した『The KAMUI IOMANDE』を事例とし、撮影時の演出、オリジナル映像の編集、第三者による再解釈により、新たな意味を持つ映像表現としてアイヌ文化が再構築される過程を検証した。また、これらの過程によって作られた映像が受け手に与える影響や、映像作品が文化的認識をどのように変容させるかについても検討した。研究方法としては、おもに映像素材の比較分析を行い、撮影、編集、再解釈を通じて形成されるアイヌ文化の多層的な意味について考察した。

内田順子氏

すべての発表が終わった後におこなわれた総合討論では、参加者より多くの意見やコメントが出されました。

まず、映像には、撮影者、被撮影者、視聴者という3つの立場があり、撮影や公開に際してそれぞれの相互作用が生じることを意識すべきという指摘がありました。それに関連し、「記録映像は誰のものか」という点についても問題提起されました。先住民文化に関する映像は、被撮影者である民族集団にとっても重要な資源となり得ます。そうした観点から、民族文化に関する映像の制作にあたっては被撮影者との共同作業が望ましいという意見が出されました。

また、写真や映像は容易に複製可能なので、それをどのように利用し、どのように利用され得るのかを慎重に考慮する必要があるという意見が示されました。その上で、当館を含め、国内のさまざまな機関が所蔵する映像やその関連情報を公開・共有する意義や必要性、そしてそうした情報を海外に向けて発信する重要性が共有されました。

最後に、今回のシンポジウム全般について、研究者だけでなく、映像制作やその活用に携わる人など、さまざまな立場の人が参加したことによって多角的な議論ができたと評価するコメントがありました。また、映像に関する今回の議論や問題提起は北方諸民族文化に限定されるものではなく、今後の研究や議論の更なる発展を期待するとのコメントもありました。

＊　＊　＊

シンポジウム会場には、延べ18名の一般参加者にお越しいただきました。また、オンラインでの参加者は延べ72名でした。二日間の限られた時間でしたが、各発表に対しては一般参加者からも質問やコメントが寄せられました。

なお、シンポジウム関連事業として、10月1日（火）午後6時半より、オホーツク・文化交流センターで「馬頭琴とサンドアート～弦と砂で紡ぐ物語コンサート」をおこないました。野花南は、馬頭琴・喉歌奏者の嵯峨治彦氏と、サンドアート・朗読担当の嵯峨孝子氏によるユニットで、3年連続の公演となりました。モンゴルの伝統曲、日本でも耳にするさまざまな楽曲の演奏、モンゴルの民話「ラクダの涙」をサンドアートで表現したパフォーマンスなど多彩な内容で、網走市や近隣市町村にお住まいの方を中心に201名の入場者がありました。

（学芸グループ　中田　篤）

コンサートのサンドアートパフォーマンス

ロビー展

アラスカの小さな村の現在：
日常・ごみ・環境変化

2024.11.1（金）～2024.12.15（日）

本展は、東北大学東北メディカルメガバンク機構助教で文化人類学者の石井花織氏が2022年から2023年の冬にアラスカを調査した折に撮影した現地の写真55点を展示しました。

アラスカのフェアバンクス市から始まり、サークル村、セルドヴィア村、ホーマー村、ノーム市をまわり、最後にアラスカ本土のほぼ西端に位置するウェールズ村の最新の状況をわかりやすく見せる写真展です。このうち、ウェールズ村の写真は、会場の半分以上を占め、アラスカ先住民の生き生きとした生活ぶりに加え、発生しつつある環境問題を示す写真を多く見ることが出来ました。

フェアバンクスからサークルへの移動では、フェアバンクスの小さな空港ターミナルやパイロットが目の前に座っている小さな飛行機、コストコ（米国発祥の会員制大型倉庫型スーパー）で大量に買い込んだ荷物など、遠隔地の先住民の暮しがよくわかるものです。

ホーマー村からセルドヴィア村への移動では、ロシアの領土だった名残の他、地球温暖化に伴う海水温の上昇が引き起こす貝毒の問題を紹介しています。

ノームからウェールズ村への移動では、先住民がクリスマスに大量に荷物を運んで帰省する様子がよく描写されていました。ウエールズ村では村のクリスマスイベントや家庭の様子の貴重な写真から、村の上下水道、排泄物の処理、ゴミ捨て場の様子、廃棄物の放置と言った写真を見ることで、アラスカの先住民の住む遠隔地でも環境の問題が存在することを学びました。

石井氏が調査でたどったルートの通りの展示の順番なので、まるで一緒に調査に行ったかのようなストーリー性のある写真展となりました。

（学芸グループ　宮川 琢）

写真展の様子

講座

アラスカの小さな村の現在

2024.11.17（土）13:00-15:30

講師：石井 花織
（東北大学 東北メディカルメガバンク機構助教）

石井花織氏

ロビー展の関連事業として、写真資料を提供下さったご本人の石井花織さんを講師に迎えて、ロビー展とは異なる写真なども使いながらアラスカで起きている環境問題等について話していただきました。

まず、当館の岡田宏明・岡田淳子元館長と同じアラスカを調査地としているため、両氏がフィールドワークしていた時代の現地協力者カレン・ワークマンさんを訪ねた話に触れられました。そして、両氏の時代と比して研究者に求められる倫理規範が厳しくなっており、現地調査が難しくなっている話を紹介されました。被調査者側が納得できる研究倫理を持つことの重要性と課題につき話がありました。次にアラスカの概要と先住民についてわかりやすい紹介がありました。州の面積や先住民の呼称についても説明があったほか、それと関連して、人種の話があり、「白人」など外見に基づく分類は、生物学上は存在しないことにも言及されました。

廃棄物処理に関する質問紙調査の結果からは、廃棄物処理に対する考え方が、行政と先住民とでは異なることがわかったとのことです。特に狩猟動物の残渣の処理については、先住民の生物の循環に対する伝統的な考え方が、感染症や野生生物の誘因を防ぎたい行政が求める処分方法とは異なることが浮き彫りになっています。

最後に先住民や遠隔地の健康の話題として、さまざまなファクターで健康格差が生じていること、温暖化が一因と考えられている貝毒リスクの増大によりアラスカ先住民の食の安全が懸念されている話がありました。調査の難しい遠隔地であってもモニタリングの試みがあることを学ぶことも出来ました。

（学芸グループ　宮川 琢）

ロビー展

北に魅せられた人1
文化人類学者原ひろ子

2024.11.1(金)-12.15(日)

「北に魅せられた人」シリーズは、北方諸民族や、北方地域に関わってきた人たちの業績を通して、北方諸民族文化や北方地域について紹介するものです。

第一回目は1960年代初めにヘヤー（カショーゴティネ）の文化調査を行った、文化人類学者の原ひろ子博士を取り上げました。原氏は、東京大学教養学部を卒業後、アメリカに留学し、カナダでヘヤーの文化に関するフィールドワークを行い、博士号を取得します。

ヘヤーはカナダ西部の極北地域（北西準州）に居住してきた人びとで、言語は北方アサバスカ諸語に属します。1960年代にはまだヘヤー文化の研究が進んでいなかったことから、原氏はこの地域に滞在し、民族誌を著しました。

その後いくつかの大学、委員会等で要職を歴任し、お茶の水女子大学ではジェンダー研究センター長も務められています。

カナダでのフィールドワークの経験は、原ひろ子氏の女性学、ジェンダー研究に大きな影響を与えています。例えば原氏の著書『子どもの文化人類学』には、教えることについて、かんじきのエピソードが紹介されています。夏に原氏が作ってもらったかんじきについて、履き方を教えてほしいと頼むと、かんじきの履き方は習うものではないと、大笑いされたというエピソードが紹介されています。このかんじきも展示しました。

原ひろ子氏から当館に対しては平成9年に写真や実物資料、図書等が寄贈されています。こうしたことから、これまでも原ひろ子氏撮影の写真展や資料の展示をおこなってきました。今回は特に植物標本42点全てを展示し、原氏の調査の業績の一端を知っていただくことができました。

（学芸グループ　笹倉いる美）

展示の様子

講座

「北の植物」北の植物研究1？
～原コレクションの同定から知った すっごく寒い地域の植物の話～

2024.12. 8（日）10:00-11:30

講師：首藤光太郎（北海道大学総合博物館助教）

首藤光太郎氏

平成5年度に、北海道大学総合博物館が中核館となった文化庁のInnovate Museum事業に当館も声をかけていただきました。この事業は非公開資料に関して七館で連携してデータベースを構築し、公開することを目的としていました。当館以外はすべて自然史系の博物館だったため、このデータベースに掲載する資料としては自然史系のものがよいだろうと、原ひろ子氏が収集した植物標本を対象にいれることにしました。ただ当館では「植物標本」という以上の分類はしていませんでしたので、この事業の一環として首藤氏に植物の同定をお願いしたという経緯があります。

そして今回ロビー展「北に魅せられた人1 文化人類学者原ひろ子」の関連事業の講師を首藤氏に務めていただきました。

講座では前半で、植物標本の役割について述べられました。植物標本の機能としては、植物が生えていた証拠として、あるいは形態の比較対象として、また研究の証拠などとして活用されており、北海道大学の植物標本は、300点以上のタイプ標本（新種であることの基準となった標本）を含む、約31万点を数え、北海道では最大の植物標本になっています。内容は、北海道、千島列島、樺太で採取したものが充実しているということです。

後半では原コレクション資料の同定方法についてレクチャーいただきました。赤道付近よりも北方のほうが植物の多様性が低く、原氏が収集したカナダのノースウエスト準州の植物についても首藤氏のこれまでの経験から見当がつくものも多かったということです。結果42点のうち、全ての科が判明し、種までわからなかったのはわずかに3種でした。

植物の分野にはアマチュアも多く、植物標本を核にしたコミュニティがあるが、高齢化がすすんでいると説明され、ぜひ若い人たちに関心をもってもらいたいと述べられました。私たちに意外だったのは、人文系の博物館に植物標本があるとそれまで考えたことがなかったという点です。今後も協働してゆければと思います。

（学芸グループ　笹倉いる美）

講習会

ウイルタ刺繍

2024.10.06（土）

講師：ウィルタ刺繍サークル　フレップ会

第38回特別展『アークティック・ステッチ　～北方民族の刺繍』の関連事業として、ウィルタ刺繍サークル・フレップ会のみなさんを講師に、ウイルタ刺繍のはいったお財布をつくる講習会を開催しました。

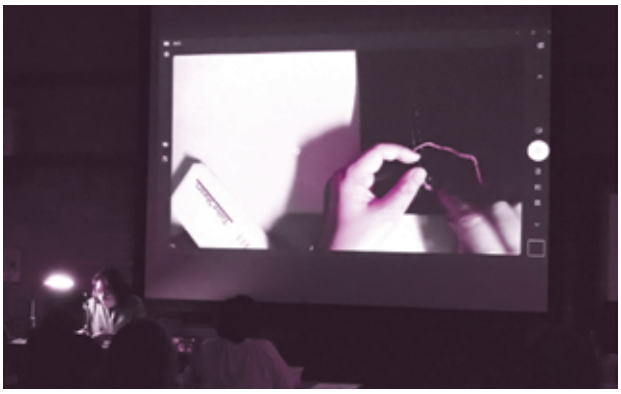
サハリンの少数民族であるウイルタの人びとは、身の回りのものやお土産品に刺繍を施していました。戦後網走に移住する人もおり、ここでもお土産品として、刺繍入りのお財布が作られていました。網走で販売されていたお財布は、黒色の別珍を素材とすることが多く、サハリンで作られていたトナカイ革製のものと同じく、内側に小さな窓が開けられているのが特徴でした。

フレップ会は、1960年代に網走に移住した北川アイ子さんを講師に昭和59(1984)年に発足し、40年以上の活動を続けてきました。北川さんが指導した刺繍は、中央をダブルチェーンステッチ（鎖目が二列に並ぶ、一度に太く刺せる技法）で、両脇を一列のチェーンステッチで囲うものです。講習会では最初に別の布でダブルチェーンステッチの練習をおこない、次にいよいよお財布用の布への刺繍に取り組みました。

ウイルタの刺繍で難しいのは、技法とともに色あわせですが、今回文様の部分はフレップ会が指定した色とし、お財布をしたてる色糸を、それぞれに選んでいただきました。2，3人に一名の講師が付くという贅沢な講習会になり、丁寧な指導もあって、時間内に全員が中央部分を完成させることができました。道外からの参加者もみられ、始終なごやかな雰囲気のなか針がすすめられていました。

※北方民族博物館ではウイルタとしていますが、フレップ会ではウィルタとイを小さく表記しています。

（学芸グループ　笹倉いる美）



スクリーンを使ってステッチの説明をする講師

調査報告

モンゴルにおける遊牧民の適応戦略に関する研究の予備調査

2024.9.11-22

調査地：モンゴル国フブスグル県

このたび、文科省科学研究費補助金による研究プロジェクト「永久凍土荒廃による流域化がもたらす水文・生態・人間活動への影響」（基盤研究（A）一般、課題番号：24H00125、代表者：飯島慈裕氏（東京都立大学））の一環として、モンゴル北部地域で調査をおこないましたので、その概要を報告します。

トナカイを放牧する少年

北方の寒冷地域には永久凍土帯が広がっていますが、近年の地球温暖化に起因する永久凍土の融解により、各地でさまざまな変化が起きています。本研究プロジェクトでは、自然地理学、雪氷学、生態学、文化人類学などの専門家が協力し、シベリア、アラスカ、モンゴル北部を対象に、永久凍土の融解に伴う環境変化、そしてそうした変化が人間社会に及ぼす影響を明らかにすることを目的としています。

私は「環境変化・社会影響グループ」の研究協力者としてこのプロジェクトに参加しています。具体的には、モンゴル北部・フブスグル県の中北部に位置するダルハド盆地と周辺の山岳地域を調査地とし、牧畜に携わる人たちを対象に研究をおこなうことになっています。今回は予備調査として、現地の状況を確認し、自然や社会の変化に対する地域住民の認識を大まかに把握することを目的としました。

地域住民への聞き取りの結果、自然環境については、気温や積雪量、植生の変化、蚊やオオカミの増加などが認識されていました。社会的変化としては、インターネットや携帯電話の普及、観光客の増加、近隣の自然保護区の設定により狩猟や放牧が制限されるようになったことなどが挙げられました。来年度以降、さらに詳細な情報を集め、研究を進展させる予定です。

（学芸グループ　中田　篤）

企画展「カザフの工芸　伝統の意匠　現代の手仕事」

中央アジア草原地域の遊牧民のカザフの人びとは、女性の手仕事として壁掛け、敷物、織物などを作り、独自の意匠を施してきました。本展ではおもにモンゴル国西部・バヤンウルギー県のカザフの工芸を取り上げて紹介します。

会期：令和7年（2025年）2月1日（土）～ 4月6日（日）
会期中の休館日：3月3日、10日、17日、24日、31日
会場：北海道立北方民族博物館・特別展示室
観覧料：無料

カザフのティーポットカバー（モンゴル・バヤンウルギー県）

企画展関連事業：

企画展講習会：「カザフの工芸」
2025年2月28日（土）13:00-16:00
参加料：有料（材料費）
講師：カブディル・アイナグル氏（カザフ刺繍伝承者）ほか（通訳あり）

企画展講座：「カザフの装飾文化」
2025年3月1日（日）10:00-11:30
参加料：無料
講師：カブディル・アイナグル氏（同上）ほか

上映会：「北方民族博物館シアター春」
2025年3月22日（土）10:00-11:30
参加料：無料
解説：中田 篤（当館主任学芸員）

ロビー展　オホーツクシリーズ 18「北の状景から」

オホーツク地域の自然や文化的活動を紹介する展示イベント「オホーツクシリーズ」の18回目として、オホーツク地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

会期：令和7年（2025年）1月4日（土）～ 1月19日（日）
会期中の休館日：1月6日、14日
会場：北海道立北方民族博物館・ロビー
観覧料：無料

INFORMATION

行事報告

◆10月5日（土）、はくぶつかんクラブ「ビーズ織りで作るミラーキーホルダー」（講師：平栗美紅解説員）を開催しました。

上手に出来ました！

◆10月13日（日）、北方民族博物館シアター秋」を開催し、当館所蔵のウデヘに関する映画を3本上映しました。

◆10月25日(金) ～ 11月7日(木) オホーツク観光局パネル展「オホーツク文化の再発見～遺跡と暮らしの記憶」がオホーツク総合振興局１階ロビーで開催され、当館も参加しました。

パネル展の様子

◆11月3日（日・祝）、第13回はくぶつかんまつりを開催しました。（協力：ポートアルバーニ・ファンクラブ、ネイパル北見、網走桂陽高校ボランティア部）

当館入口のおまつり会場の様子

◆11月23日（土）、当館は「あばしりまなび塾フェスティバル」(会場：エコーセンター 2000)に出典参加しました（革製キーホルダー）。

当館のもよおしに参加したみなさん

◆11月30日（土）、はくぶつかんクラブ「トナカイ刺繍（ししゅう）とフェルトボール」（講師：平栗美紅解説員）を開催しました。(写真:右上)

一番乗りです！

◆12月7日（土）、はくぶつかんクラブ「皮とフェルトで作るカレンダー」(講師:菅原章子解説員）を開催しました。

大きなカレンダーです！

北方民族博物館だより
No.135
令和6年（2024年）12月24日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会